

Contents

特集：共和党大会とマッケインの逆襲	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”Bring back the real McCain” 「真のマッケインに戻れ」	8p
< From the Editor > 共和党「王朝」の法則	9p

特集：共和党大会とマッケインの逆襲

先週に引き続き、米大統領選挙の党大会についての報告です。今週はミネソタ州セントポールで共和党大会が行われました。先週号でも指摘した通り、2つの党大会が「2週連続」で行われることは、長い歴史の中でも非常にめずらしいことであり、「後攻め」に多少の利があるはず。そこでマッケイン候補が繰り出してきたのは、「44歳の女性アラスカ州知事を副大統領候補に指名する」という大胆な勝負手でした。

大抜擢人事の効果は抜群で、オバマによる歴史的な受諾演説の記憶は速やかに薄れ、選挙戦の関心は一気に彼女に集中しました。とはいえ、これは危険なギャンブルであることも否定できません。逆襲の成否は、サラ・ペイリンの未知数の能力に懸かっています。

わずか1週間で、政治が劇的に変化した様子を追いかけてみました。

流れが変わった1週間

2008年米大統領選挙は息の長い戦いである。これまで多くのスターが登場しては消えて行った。2007年夏の時点では、「共和党はジュリアーニ、民主党はヒラリーのニューヨーク決戦」が本命と予想されていた。今年になって予備選挙が始まってからも、フレッド・トンプソン、マイク・ハッカビーなどの「希望の星」が、浮かんでは消えていった。

しかし本選挙を2ヵ月後に控えたタイミングで、まったく新しいスターが誕生した。8月29日にマッケインがみずからのRunning Mateに指名するまで、米国民はサラ・ペイリン知事（アラスカ州）をほとんど知らなかったはずである。しかしわずか1週間で、彼女は米国政治のメインステージに立ち、今や勝敗の鍵を握る存在となってしまった。

下記のグラフは、intrade.comにおける「マッケイン株」の値動きである。同株はネット上で、「マッケインが当選すれば1ドル」になる前提で取引されており、最近では40セント前後で推移している。これは「勝率40%」を意味しているといっているだろう。

マッケイン株は、28日のオバマの名演説の後に下落し、29日の副大統領候補発表で上昇した。しかるに週末に、ペイリンの家族をめぐるスキャンダルが伝わると、再び40セントを割り込んだ。そして受諾演説を行った翌日には再び反発している。

John McCain to win 2008 US Presidential Election¹



数字上は、マッケインの当選確率が上昇したわけではない。ただし投票日の2ヶ月前になって、メディアの注目と有権者の関心を初めて共和党側が掴んだ意味は大きい。2008年米大統領選挙では、常に民主党側にスポットライトが当たっていた。オバマ対ヒラリーが歴史に残る激戦であったことも手伝って、資金量でも情報発信量でも一貫して民主党が共和党を凌駕してきた。その流れが初めて変わったのである。

客観情勢を考えれば、評判の悪いブッシュ政権2期8年の後で、「よくまあ、共和党がここまで盛り返したものだ」と感心すべきなのかもしれない。戦後の米国政治において、2期8年の政権の後で反対党から大統領が出なかったのは1988年の1回限りである。

おそらく2008年大統領選挙は、僅差の勝負になるはずである(本誌はずっとそう言い続けて来たが)。おそらく、「投票日前に行われる4回のテレビ討論会において、失言があった方が負ける」といったミクロの戦いであろう。特にバイデン対ペイリンという副大統領候補の討論会も、大いに楽しみになったといえるのではないだろうか。

- 9月26日 大統領候補討論会(1)外交問題
- 10月2日 副大統領候補討論会
- 10月7日 大統領候補討論会(2)タウンホール
- 10月15日 大統領候補討論会(3)内政問題
- 11月4日 一般有権者投票

¹ http://www.intrade.com/jsp/intrade/common/c_cd.jsp?conDetailID=376101&z=1220488607776#

ペイリン指名で何が変わったか

具体的な「ペイリン効果」については、以下の3点を指摘することができる。

- (1) **オバマがメディアから消えた**：例えば9月1日には、オバマはハリケーン・グスタフに関する感動的なスピーチを行っているのだが、それはほとんど報道されていない²。8月28日の歴史的な受諾演説も急速に印象が薄れつつある。

8万人のスタジアムを満員にした民主党に比べ、**もともと共和党大会は盛り上がり**を欠いていた。自分の選挙が危ない議員は欠席が相次いだし、会場では空席も目立っていた。都合よくハリケーン・グスタフが来たから、「Country First」の美名の下で規模を縮小したというのが正直なところである。

しかも、共和党大会には目玉商品がなかった。ところがペイリンの家族をめぐる問題が直前に浮上して、「どんな演説をするのか」「彼女の娘とそのボーイフレンドの顔を一目見てみたい」などと、**副大統領候補受諾演説が一種のキラ・コンテンツ**となった。これらは望外の幸運と言えるだろう。

- (2) **社会問題に再び注目が集まる**：ペイリンの登場によって、**今まで選挙戦で語られてこなかった社会問題に火が点いた**。彼女は「人工中絶反対」「NRAの終身会員」「石油掘削に賛成」という典型的な保守派であり、共和党の保守基盤（Base）には強くアピールする。このことがリベラル派の反感を買い、一種の“Culture Wars”に発展しつつある。しかも、ペイリン家の問題は、「中絶の是非」「親子関係」「性教育」「男女共同参画」「障害者」などの微妙な問題を一気にぶちまけることになった。

2008年の米国は2004年とは違い、安全保障問題（イラク、イラン、グルジア、北朝鮮、その他）と、経済問題（サブプライム、石油高、医療保険、その他）があまりにも深刻なので、社会問題には手が回らないと思われていた。ところが政治とは恐ろしいもので、ほんの1週間で雰囲気が変わってしまった。

この流れは共和党側にとって「願ったりかなったり」の展開であろう。おそらくペイリンは、リベラル派の女性に嫌われるタイプである（ミスコンテストにも出場している！）。これでリベラル派が強硬に反発すると、それによって保守派が団結する、あるいは無党派層の同情が彼女に集まる可能性がある³。

同時に、**争点が経済や安全保障から外れることも、共和党は大歓迎**であろう。

² TIMEの記者がブログで「19ヶ月もオバマを取材してきて、こんなに感動したことはない」と述べているのだが、誌面には反映されなかったようだ。

http://www.time-blog.com/swampland/2008/09/obama_on_gustav.html

³ 2004年の米大統領選で本誌が指摘した「憤兵は敗れる」の再現となってしまう。

- (3) **マッケインへの疑念**：共和党のマイナス面としては、「自分が72歳と高齢なのに、経験不足の候補者を副大統領に選んで大丈夫なのか」「準備不足のまま選んだ頼りない候補者ではないのか」という**マッケインの判断力への疑問が生じた**ことが指摘できる。この点は、今後、民主党側からも厳しく追及されるだろう。

そもそも、マッケイン自身は安全保障問題に関心が強く、社会政策では中道寄りだったはずである。いくら保守基盤の機嫌をとるためとはいえ、なぜ極端に保守的な政治家を選んでしまったのか。これでは「**無党派層を惹きつけられる**」という彼の特性が失われるかもしれない。

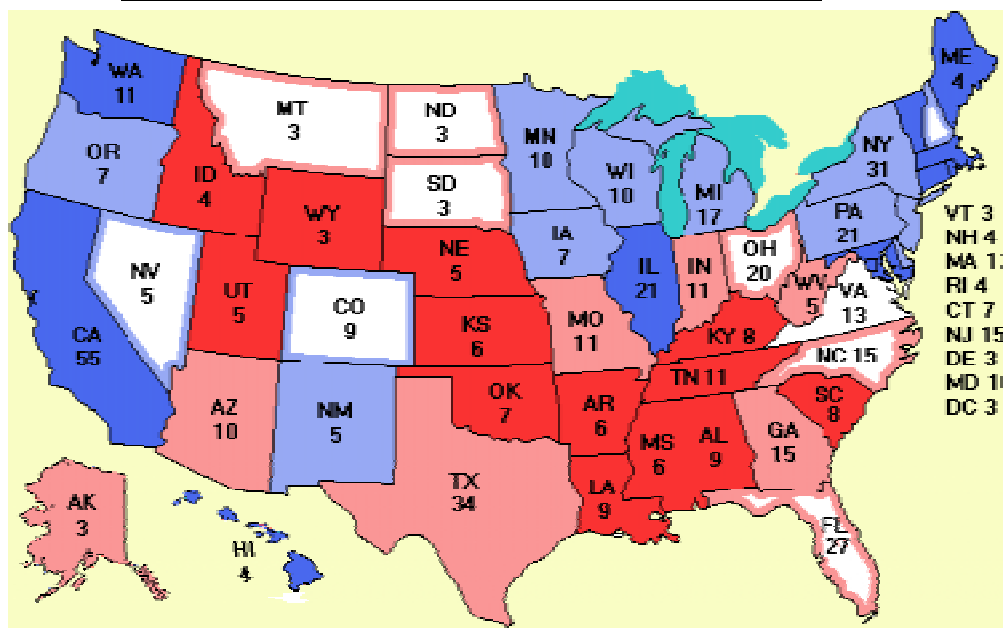
逆転勝利のための条件とは

当初、副大統領候補のショートリストに名前が上がっていたのは、「本命」：ミット・ロムニー元知事（マサチューセッツ州）、「対抗」：ティム・ポーレンティ知事（ミネソタ州）、「穴馬」：ロブ・ポートマン下院議員（オハイオ州）などであった。

とはいえ、**普通の選択をしていたのでは、勝ち目は薄い**。マッケインはそのように判断したのであろう。勝敗のシミュレーションを行う場合、全国レベルの世論調査はあまり意味がなく、州ごとの勝敗を予想する必要がある。以下はその一例であり、青が民主党優位、赤が共和党優位である。計算してみると、オバマが278票で勝ち、ということになる。

Electoral College 方式の試算⁴

オバマ：278、マッケイン：247、優劣不明：13 (=VA)



⁴ <http://www.electoral-vote.com/index.html>で毎日の変化が表示されている。上記は8月29日時点のもの。

実はこの現状は、2004年選挙でブッシュがケリーを破ったときの色分けとそれほど変わっていない。2004年はブッシュ286、ケリー252となったが、4年前と比べると、4つのレッド州がブルーに変わり、バージニア州が白（優劣不明）となっただけである。従ってマッケインとしては、まずバージニア州の確保を目指した上で、さらにどこかの州で10票以上を上積みする必要がある。ところが、奪われた4州の奪還は容易ではない。

- * アイオワ州 (IA=7): 年初のアイオワ党員集会においてオバマが劇的な勝利を収めており、オバマ人気は定着している。
- * コロラド州 (CO=9): 民主党大会が行われたばかり。オバマ受諾演説のために用意されたデンプターの8万人分の座席のうち、半数は地元住民に配られている。
- * ニューメキシコ (NM=5) とネバダ州 (NV=5): とともにヒスパニック人口が急増している。彼らはヒラリー支持が多く、基本的に民主党員である。

それではほかに狙えそうな州はないか。定番の激戦地、ペンシルバニア州 (PA=21) は、今回はバイデンの出身地ということもあって難しい。ニューハンプシャー州 (NH=4) は小さくて大勢に影響がない。となると、ミシガン州 (MI=17)、ウィスコンシン州 (WI=10)、ミネソタ州 (MN=10) 辺りをひっくり返す必要がある……。

それと同時に、共和党は2000年の激戦地フロリダ州 (FL=27)、2004年の激戦地オハイオ州 (OH=20) を死守しなければならない。こうして計算してみると、マッケインが8月下旬の時点で「尋常なことでは勝ち目がない」と腹をくくった理由が見えてくる。

勝負手発動の狙いは何か

サラ・ペイリンの副大統領指名に対し、当初は「ヒラリーを支持していた1800万人を切り崩すのが狙い」という解説をしばしば耳にした。

筆者は、この解釈は疑わしいと思っている。ヒラリー支持者たちは総じてリベラルであり、男性中心社会に対するルサンチマンは有していても、「女性だから選ばれた」保守的な副大統領を支持するとは考えにくい。また、都会的で政策通のヒラリーと、田舎育ちでアウトサイダーのペイリンとではタイプが違い過ぎる。おそらく、彼女たちは迷った挙句に最後は民主党への忠誠心を優先するのではないか。そもそも女性の投票行動は、男性に比べて義理堅いし、変わりにくいのである。

むしろ焦点となってくるのは男性票の動向であろう。予備選段階で、オバマはオハイオ州、ペンシルバニア州、ウェストバージニア州などで苦戦していた。これにミシガン州も加えて、東部から中西部にかけての製造業州は、文字通りの決戦場となるはずだ。そしてこれらの州のブルーカラーの白人男性は、オバマよりもヒラリーを支持していた。彼らの中に、「黒人の指導者」に対する心理的な抵抗があることは想像に難くない。

だとすれば、共和党のチケットに「魅力的な女性」が入ってくるこの意味は小さくない。民主党側は、ペンシルバニア州の Working Class 出身のバイデンを副大統領に指名してオバマの弱点を補強しているが、それとはまったく逆方向の狙いである。結果はどう出るか分からないものの、男性票は「浮気症」だという点にチャンスがありそうだ。

もうひとつの解釈は、「マッケインは共和党の保守基盤 (Base) の支持を得るための見返り」というもので、これはある程度、当たっていよう。保守派の中からは、「これで安心してマッケインを応援できる」という声もあり、実際に発表の直後にはマッケイン陣営への募金が殺到した。とはいえ、「真面目に考えた結論とは思えない」と失望を表明する向きもけっこう少なくはない⁵。

そもそも共和党は、大統領候補には順当な人物を選ぶ一方で、副大統領候補は縦横無尽かつ大胆に選ぶ傾向がある。(これは民主党とは正反対の伝統といえる)。もっとも有名なのは、ブッシュ父大統領の副大統領であったダン・クエールであろう。「小学校の授業参観に行き、子供の前でポテトのつぶりを間違えた」とか、「大統領が暗殺されたら、シークレットサービスはすぐにクエールを射殺するように」というジョークがあったとか、エピソードには事欠かない人物である。それでもクエールは、党内右派の覚えがめでたい若き共和党のスターだったので、ブッシュ父は最期まで彼を切れなかった。

今回も早速、ペイリンをネタにしたジョークはあちこちで誕生している。

副大統領候補同士の討論会の席上で、バイデン上院議員が言った。

「もしもロシアが再びグルジア (Georgia) に侵攻したら、あなたはどうするのか？」

ペイリン知事は答えた。

「ただちにエアフォースワンに乗って、アトランタに飛びます！」

もっともペイリンの場合は、9月3日の副大統領受諾演説を見る限り、乾坤一擲の舞台を立派に務めてみせたし、度胸もすわっていた。おそらくクエールよりは、「伸びしろ」のある人物なのではないだろうか。

ただし、危なっかしい副大統領候補を選んだことにより、マッケインがオバマを「経験不足」とこきおろす勢いは、いささか鈍ることになるだろう。ちょうど、オバマがバイデンを選んだことで、マッケインを「高齢過ぎる」と攻めにくくなったのと同じ構図である。

今回のチケットは、民主党も共和党も「経験者と未経験者」の組み合わせとなった。あらためて、テレビ討論会でのパフォーマンスがモノを言いそうだ。ただしこういうとき、意外と痛い目を見るのは「経験者」の側なのである。

⁵ 例えばネオコン論客のデイビッド・フラムは、みずからのブログの中で「これが本当にCountry Firstの選択なのか」と疑問を呈している (David Frum's Diary on National Review Online 8月29日付け)。

<http://frum.nationalreview.com/post/?q=M2VhOWE0N2VkOWI3MDdlODRlZWE4ODljMDc2NjliZDk=>

あらためて考える「人間・マッケイン」

将棋の世界では、「形勢不明のときは、相手がもっとも嫌がる手を指せ」(大山理論)とか、あるいは「普通に指しては負けそうなときは、敢えて最善手を避ける」(米長理論)といった高度な考え方がある。「勝率4割」と目されるマッケインとしては、まさにそういう拳に出るべきタイミングであったといえるだろう。

「マッケイン=ペイリン」というチケットは、最悪、ボロ負けに至る可能性もあるが、これで一気に優劣が不明になったと見ることも出来る。こういうリスクの高い、物議をかもしような決定を行ってくるあたり、マッケインはやはり「変わり者」(Maverick)であり、「勝負師」(Gambler)タイプなのであろう。

言うまでもなく、「軍人・マッケイン」はベトナムで5年半の捕虜生活に耐えた歴戦の勇者である。いかなる政敵といえども、「彼の愛国心を疑うことだけは不可能」と言われている。そして「政治家・マッケイン」は、党の保守基盤を激怒させるような政策を次々に手がけてきた。選挙資金改革、健全財政主義、気候変動への取り組み、そして寛大な移民政策などだ。今回の選挙戦においても、イラクへの増派支持、自由貿易、石油掘削提案など、何度もリスクの高い論陣を張って勝ち残ってきた。この手の政治的な勇敢さと旗幟鮮明さは、相手候補であるオバマにはない魅力といえる。

こうした経歴から、マッケインはしばしば「信念の人」(a man of conviction)とみなされてきた。とはいえ、今回の大胆な決定を見ても分かるとおり、自らの主義主張に対するこだわりはそれほど強くない。「何を」については頑固であるが、「いかに」については意外なくらい柔軟だ。保守基盤と妥協することも痛痒を感じていないし、議会でも民主党との間で超党派の法案をまとめあげることが得意としてきた。

むしろ、彼は「美学の人」(a man of honor)と考える方が当たっているのだろう。つくづく小泉純一郎に似ていると思うのだが、マッケインの行動基準は「みずからの名誉を守れるかどうか」に尽きている。9月8日号のTIME誌が、「Honor」という表題でマッケイン特集を行っている。彼はかつて、Keating Five という収賄事件に連座したことがあり、そのことを「ベトナムの捕虜時代よりもつらかった」と振り返っている。後年、選挙資金問題に取り組むことになったのは、このときのことを悔やんだからであるという。

また、東京財団の「現代アメリカ研究プロジェクト」の中で、渡辺将人氏が興味深い報告を行っている⁶。保守派の中でマッケインは評判が悪いが、人格的には信頼されている。なぜなら「彼はブシドー(武士道)の男だから」。これがあるからこそ、共和党予備選で生き残ることができたのだという。不人気な共和党にとって、マッケインが望みを託せる唯一の希望の星となっている点は、まことに皮肉としか言いようがない。

⁶ アメリカNOW17号 マッケイン候補に対する保守メディアの批判と「武士道」的評価 (2008年2月20日 渡辺将人) <http://www.tkfd.or.jp/research/sub1.php?id=87>

<今週の”The Economist”誌から>

”Bring back the real McCain”

「真のマッケインに戻れ」

Cover story

August 28th 2008

* 今週は共和党大会。先週に引き続き、候補者への助言が行われています。The Economist 誌は、マッケインに対して「素に帰れ」とのラブコールを送っています。

<要約>

共和党は今週、信じられないほど良い状態で党大会を迎える。国の現状に満足している人がほとんどいないのに、マッケインはオバマと僅差である。災厄に満ちたブッシュ8年の治世の後も、共和党政権が続くかもしれない。ひとつにはデンバーで名演説をものしたオバマの弱点のせいだ。世界は荒れ放題だが外交経験がなく、浮いているように見えてしまう。そしてそれ以上に、ジョン・マッケインは共和党にとって唯一の希望の星である。

彼の愛国心は折り紙つき。党の欠点(例えば移民法と環境問題)に対する反対の歴史は、無党派層を大いに惹きつけるものがある。本誌は特に、彼の断固たる自由貿易への支持とイラク問題へのゆるぎない姿勢を賞賛する。何より、オバマが見せたことのないような政治的勇敢さを持っている。彼なら大統領として、民主党議会と超党派の取引が可能だろう。

マッケインが抱える問題その1は72歳という年齢で、2期目のレーガンを除けば就任時点で最長老の大統領となる。次なる障害は短気さだが、選挙戦中は抑制しているようだ。

3番目は彼が戦争好きだと思われることだ。イラン爆撃を恐れず、ロシアに対決姿勢をとり、古くからフセイン排除の論陣を張っていた。これは考え過ぎで、統幕議長や並み居る顧問たちが反対する中で爆撃はしない。そういう誤解は解かなければならない。

党大会以降の更なる懸念とは、彼が当選を目指すために信念を曲げてしまうことだ。かつてはよく多国間主義を語っていたが、選挙戦中にタカ派に流れやすくなった。例えば民主主義国だけで第2国連を作れというアイデアは、無用な対立を生むだけである。

より問題なのは内政面である。マッケインは彼を信用していない保守派の支持を必要としているが、そのことによって無党派層の支持を失ってしまうかもしれない。

マッケインは小さな政府、健全財政の信奉者であり、保守派の妊娠中絶問題への関心は薄かった。ところがここへ来て、減税を提案する一方で宗教右派に歩み寄っている。「ガソリン税免除」のようなポピュリズムも口にしている。これらが党内右派を喜ばせるだけのテクニックなら、また消えるかもしれないが、それにしてもギャンブル過ぎないか。

投票日まであと2ヶ月、まだ時間はある。中絶や同性愛結婚で福音派に歩み寄るよりも、税制に時間をを使うべきだ。昔のマッケインはブッシュ減税に嘖み付いたものだ。今ではそれを恒久化するばかりか、遺産税をなくそうとさえしている。企業減税も提案しているが、中間層にとっての利益は少ない。それでは財政赤字が拡大するばかりである。

タカ派の外交、無責任な減税、宗教への言及。これでは民主党がレッテルを貼るとおり、ブッシュの3期目のようではないか。本紙はマッケインの1期目を希望する。

< From the Editor > 共和党「王朝」の法則

クリントンの選挙参謀を務めたディック・モリスの回顧録『オーバル・オフィス』（フジテレビ出版）の中に、こんなエピソードが出てきます。

1996年の大統領選挙で、クリントンがもっとも恐れた相手は元テネシー州知事のラマー・アレクザンダーでした。知名度は高くないけれども、クリントンにそっくりなタイプなので、2人が勝負していたら面白いことになっただろう。恐れるクリントンに向かって、選挙参謀のディック・モリスは断言します。「心配はいらない。共和党は大統領候補を選ぶときに正統性を重んじる。かならずドール上院議員を選んでくる」。モリスはもともと共和党系のコンサルタントだったから、相手の手の内が読めていたのである。

あれよあれよという間に、意外な人物が全米の脚光をあびて大統領候補になる、というのは民主党の専売特許です。「州知事を1期やっただけの、ピーナツ畑の農夫さん」（ジミー・カーター）を大統領候補にしたこともあります。上院1期目のオバマを候補者に選んでしまった今回も、その大胆さにおいては相当なものと言っていいでしょう。

対照的に、共和党からは意外な候補者はめったに出てきません。1964年のバリー・ゴールドウォーター上院議員を除けば、ほとんどが順当な候補者です。

モリスは、共和党の大統領候補選びの法則を次のように説明しています。

- (1) 予備選で2人が激戦となったときは、勝った側が大統領選に挑む。
- (2) それで失敗した場合は、2位だった候補者が次の機会に挑戦する。

こんな単純な法則で、ほとんどの説明が付いてしまうのです。1976年は、フォードとレーガンが対立した。フォードが大統領選に挑戦して敗北。だから1980年はレーガン。そのレーガンが2期務めて、1988年はブッシュ父とドールが対立する。ブッシュが当選。そして1992年にクリントンに敗れて再選に失敗。

ということは、1996年はドールが出てくることになる。モリスの読み通り、ドールが順当に候補者の座を射止めたが、クリントンに返り討ちに遭ってしまう。

2000年選挙は、ブッシュとマッケインの争いでした。ブッシュが勝って2期務めた。ということは、2008年の「正統性」はマッケインにあります。実際のマッケインは大逆転からチャンスを拾ったし、党内では異端視されているけれども、過去のパターンからいえば選ばれることには何の不思議もないのです。

その証拠に、普通であれば72歳という高齢がネックになりそうなものなのに、党内ではそういう反論が出ない。なんとなれば、1980年のレーガンは69歳、1996年のドールは72歳。正統性を持つ候補者に対して、「お前は駄目だ」とは言えないのである。

さて、マッケインの挑戦が失敗した場合はどうなるでしょう。2008年に2位だったのはミット・ロムニーでした。ということは、2012年の正統性はロムニーにあり。ずいぶん先の話になってしまいますが、覚えておきましょう。(そのときまで本誌が続いているかどうかは、ちょっと怪しいですけども)

*次号は2008年9月19日(金)を予定しています。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までをお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com